

正確な起源は不明 日本では万葉集に登場

「すだれ資料館」は国内外の珍しい簾や、簾の製造に使われていた道具や機械類、それに簾の歴史を知るための文献や資料などを集めた国内唯一の資料館だ。

「大阪で一番高い金剛山や、葛城山系の麓には真竹が自生しています。」



河内長野市や富田林市など大阪の南部では、それを利用して竹の簾づくりが盛んになり、一大産地として形成されていきました」

案内して下さったのは、「すだれ資料館」を運営し大阪金剛簾の製造メーカーの一つ、井上スタレ株式会社に勤務する増井良輔さん。平成十六年にオープンした「すだれ資料館」の開館準備にも携わっている。

簾

簾ごしの隔ての世界

日差しを遮り風を通しながら空間を仕切る。透け感のある簾は、空調が効くようになった現在でも、涼を誘う日本の夏の風物詩のひとつとして、またインテリアとして親しまれている。

大阪府には、昔ながらの簾づくりを継承した「大阪金剛簾」があり国の伝統的工芸品の指定を受けている。その生産地・河内長野市にある「すだれ資料館」を訪ね、簾の歴史と変遷について伺った。

「実は簾の歴史はよくわかっていないんです。記録の中で簾という言葉が確認できるのは七世紀です。額田王が天智天皇（在位六六九～六七一年）を想って詠んだ『君待つとわが恋ひをれば わが屋戸の 簾動かし 秋の風吹く』という歌が『万葉集』に収録されていることから、このころには高貴な人たちの住まいに簾が使われていたことがわかります」

中国では『漢書』の文帝（在位紀元前一八〇～一五七年頃）の時代に簾の記述があり、韓国でも高句麗、百濟、新羅が鼎立した三國時代に簾が存在したという文献が確認されている。中国から仏教とともに日本へ伝わった可能性がある一方、新潟県の青田遺跡では約三千年前の簾状の遺物が出土していることから、日本でも独自に発達した可能性も否定できないと増井さんは言う。

御簾ごしに交わす想い

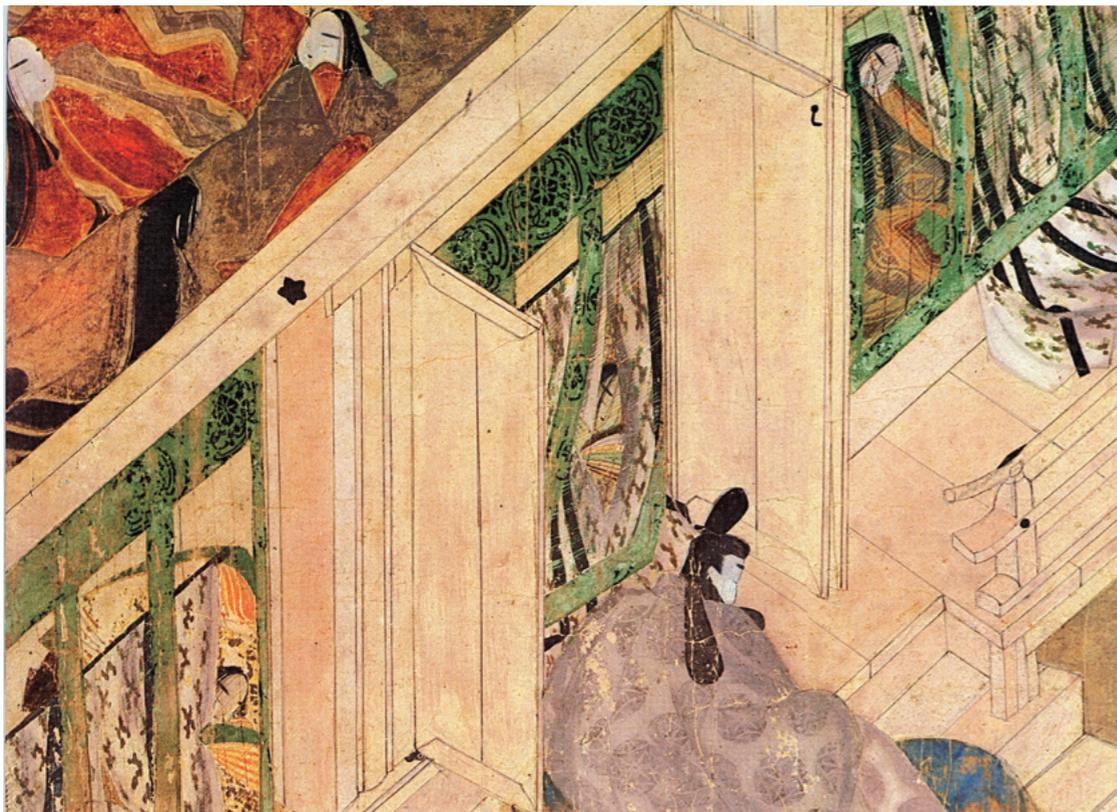
平安時代になると、簾は『枕草子』や『源氏物語』にも登場する。

「寝殿造や中世の書院造といった日

本的な建築様式の発達によって、外の庭と一体化した空間を演出したのが簾です。寝殿造の建物の内部は、几帳や屏風、簾などで仕切りをしています」

同時に、簾には外からの侵入を拒むような心理的な距離を置くという役割もあつたほか、風を通しながらも日差しを和らげていたと思われる。「透け感があるのも大きな特徴です。簾ごしに室内からは明るい外を見ることはできますが、外からは暗い室内が見えないので、高貴な人たちが自分たちの姿を見られることなく、外の様子をうかがうには格好の調度品だったのでしょう。逆に、外にいる人たちは簾の向こうにどんな人がいるんだろうと想像を巡らし、歌でやりとりしていた。男も女も簾ごしにお互いを観察し、想いを伝えようとしていたんですね」

簾の中でも、四方を布で美しく縁取りした「御簾」は、長い間、貴族など一部の特権階級のものだった。神社仏閣の拝殿や本殿といった神聖な場所には現在も御簾が下り下げら



源氏物語絵巻『竹河一』
美しい貴公子の一人薫が、縁続きになる玉鬘を親しみを込めて訪れた場面。
御簾の中に見えるのは、噂話をする侍女たち。



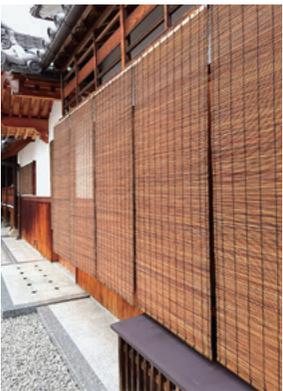
金剛寺「北朝三上皇御在所」。光厳・光明・崇光の三上天皇と皇太子直仁の四方が、正平9年(1354)年3月から、正平12年2月に至る間、行在所として使用された間。

れていることが多い。神仏と人、あるいは高貴な人と庶民を隔てる境界線が御簾だったのだろう。

「昔は天皇のような位の高い人は絵に描いてはいけなかったので、御簾の陰に描かれていたりするんですね。絵巻物の最初の所に御簾が描かれていることがありますが、これは『この巻物には大切なものが描かれている』という、シンボリックな使われ方です。江戸時代になって、軒下につり下がっているような簾は庶民に解

て乾燥させ、細く割ってヒゴにしませ。御簾の場合は、染料で黄色く染めて、編み上げる準備がやっと整います」

かつては全ての工程が手作業だったが大正時代に足踏みの製簾機が考案されたからは、編む時間が大幅に短縮された。戦後の一九四八年には、ここ河内長野市で回転刃を使ったヒゴの製造機械が開発されて、大量生産が可能になった。こうして簾が一般化して、さらに大量生産が可能になると、いわゆる座敷簾が登場する。一九六〇年代には簾産業は全盛期を迎え、海外ではおしやれなインテリアとして人気が出て、製品のほとんどを輸出していた時代もあった。



簾を下げると光を遮り外からは中が見えず、通風は良い。

禁されましたが、御簾はご法度でした。民間で御簾が使えるようになったのは、明治維新以降です」

ヒゴを二本一本編む

簾のつくり方だが、筵むしろや俵か、蓑みのなどをつくるときに使われた孤こ桁けたという道具を利用し、ヒゴを二本ずつ置いて糸を交差させて編んでいたのではないかと推測されている。

御簾には神聖な植物の象徴であり、昔から生命力のある竹が用いられて



「津山松平藩主 所用乗り物」。「物見」と呼ばれる明かり取りと、外を見るための窓に簾がつり下げられている。簾の文様は「青海波」。「物見」の裏側も凝って鳥の絵が描かれている。(津山郷土博物館所蔵)



いるが、軒下などで使用される簾には葺むや蒲がまなどが使用されてきた。「竹の場合は、ヒゴにするまでの工程に手間がかかります。まず節を削って、皮をむきます。太さによって縦に六〜十二本に割り、それをさらに半分に割って、使えない内側部分を落とします。使用する表皮部分を一日干し

「今はどこにでもエアコンやカーテンがありますから、機能的な側面が弱くなり、簾は美観商品になっています。例えば、和菓子屋さんでは、意匠に使っていただいたり、飲食店では、適度な開放感があると、席と席の間の間仕切りとして好評です。もちろん住宅用も製造しています。おしゃれな簾が一枚あると、落ち着



簾を上げると、庭との一体感が生まれる。

いた雰囲気醸しますし、日本的な演出をしやすいので、レトロな商品が好まれる傾向があります。他には焼き杉などを使った木製の商品も製造しています。ほとんどの商品は口くちでストックくちして、ご注文をいただいたからカットしています。ただし、御簾はそれができないので、



簾の良さを世界に発信したいという井上スタレ(株)の増井良輔さん。

オーダーをいただいているからヒゴを準備し、職人が織って製作します。昔ながらの手割りでの竹ヒゴづくりや、孤こ桁けたを使用した『亀甲織り』などが出来る簾職人の技術の継承にも注力しています」

神社仏閣からの依頼で、修復を担当する機会も多く、井上スタレでは御簾づくりの伝統を継承していくために、さまざまな協力をしている。

「御簾は平安時代に確認できて、当時も今もほぼ同じ姿でつくられているものです。百年後もおそろく同じ姿のまま存在するでしょう。日本文化が育んだ御簾の伝統を守りながら、インテリアとしての簾の可能性も拡げていきたい。『和』の素晴らしさが世界で認め始められている今こそ、チャンスだと思っています」

増井さんの言葉に力がこもった。



「すだれ資料館」は、井上スタレ(株)が、平成16年に「簾」の産地、大阪府河内長野市に設立。歴史的に価値の高い簾、貴重な道具、巻物、文献、映像などの資料が展示されている。